

日八月六十五年正大

破產（下）

梨羅

「シチオに居た時はナ、めをと喧嘩をようしましたがナ、町へ出たらホットしたよつて何や勝がぬけたようで……」とコジニヤの入口で脚の損じたカデイラに倚りながら細い眼をして云つたのも想ひ出された。

いよいよ投げ出して一家はシチオの知人の許へ没落と定まつた、と聞いた日私は他の日本人の家で偶然彼女と出逢つた。二言三言私が重い口から慰めの言葉を洩べた彼女は

「バ、イはバ、イで何ぞ仕事を見付け、ベードロはベードロでエンブレガードにでも行んだら、わしは小さい子供等と家借つて安氣にして居られますさかい、ベードロも田舎へ行くはいや云ふよつてナ……」

翼の下に多数の雛を抱いて泰然として居るのが彼女自身で、その母と稚兒との餌を運ぶのは夫と長男の役目だと彼女は主張するのである。

母性が婦人を強くする事實を認める私も是に至つて、エレンケイの説を承けて母性保護を十年一日の如く主張する日本の某女史と、他の某女史との論争を想ひ出して「町には居られやしませんよ、あんなに云ふけど……借錢を奇麗に済ますのでないんだから、足らんなりにケブラするんですからね……」彼女が歸つたあと其の人がこう私に云つて聞かせた。

「百々として居りやいのに」とも云つた。

その後又數日過ぎた。半年程前から兆ざしつゝあつた不景氣が愈々に濟ますのでないんだから、足らんなりにケ布拉するんですからね……」

「わしとこばかりぢやあらへんでナア」Sさんはこう云つて弱々

しく笑つて居た。

私は思つた——それでいい、斯ういふ時は魂を底ぬけの無反省にして置く事だ、善良な人々よ！

今日の悲痛もやはれ流れで止まぬ時の力が醫してくれるだろう。

Sさんの家にも遂に運命の日が來た。カミニオンは僅ばかりの家

具を載せて、猶人間の乗るのを待つように冷酷な醜い姿を門口に横

裏口から現はれたが、何時もの通り周圍にまつわる子供達をカミニオンの方へ追ひやると、一人セカ

くと私の家に向つて走つて来る

告別に來るのかと思つてゐる

眼ばかりキラ／＼光らせて居た。

「ベードロは來まへんやろか」と、何時もの通り苦い微笑を浮べた彼女は

「バ、イはバ、イで何ぞ仕事を見付け、ベードロはベードロでエンブレガードにでも行んだら、わしは小さい子供等と家借つて安氣にして居られますさかい、ベードロも田舎へ行くはいや云ふよつてナ……」

翼の下に多数の雛を抱いて泰然として居るのが彼女自身で、その母と稚兒との餌を運ぶのは夫と長男の役目だと彼女は主張するのである。

母性が婦人を強くする事實を認める私も是に至つて、エレンケイの説を承けて母性保護を十年一日の如く主張する日本の某女史と、他の某女史との論争を想ひ出して

「町には居られやしませんよ、あんなに云ふけど……借錢を奇麗に済ますのでないんだから、足らんなりにケ布拉するんですからね……」

彼女が歸つたあと其の人がこう私に云つて聞かせた。

「百々として居りやいのに」とも云つた。

その後又數日過ぎた。半年程前から兆ざしつゝあつた不景氣が愈々に濟ますのでないんだから、足らんなりにケ布拉するんですからね……」

彼女が歸つたあと其の人がこう私に云つて聞かせた。

「百々として居りやいのに」とも云つた。

